

放送ニュースの指示語の研究

ーリード文と本文の関連に着目してー

井上 裕之

1. はじめに

放送ニュース(以下、ニュース)は、ラジオやテレビといった音声媒体で伝えられる報道文だが、近年はネット上で、目で読む機会も増えている。では、活字媒体で発展してきた新聞記事とはどのような違いがあるのだろうか。ニュースは、文体や文章構成の研究は進んでいるが、談話構造という視点からの研究は限られ、新聞記事との比較の研究も少ない。本稿では、両媒体の報道文を、文の「つながり」という視点から比較し、ニュースの特徴を明らかにしてゆきたい。

その際、単に比較するのではなく、報道文に特徴的な「リード文」(新聞では前文とも呼ぶ)の存在に着目する。報道文の文章構成は、最も重要なことから書き始めるため「逆三角形」(井上1988、小宮2011)型とも称され、冒頭部にリード文があることが共通する。リード文は当該ニュース・記事の要旨¹⁾で、内容理解を助ける役割を担うなどとされる。一方、リード文に続く「本文」には、当該ニュース・記事の詳細な内容が盛り込まれる。

本稿では、文のつながりを示すことから「承前記号」(林1973)とされる指示語に注目する。本文の第1・2文冒頭に出現する指示語の頻度や種類を調べ、リード文からどのようなつながりで本文が展

開してゆくのか、そしてそれらがどのようにリード文と関連を持ってゆくのかを見るのが本稿のねらいである。

2. 先行研究

文章中の文と文のつながりを表す指示語の研究としては、林(1973)が挙げられる。林は、文章は「流れ」(つながろうとする力)と、「構え」(離れようとする力)からなるとした上で、文章中の1つの文を言い起こす型を、始発型、承前型、転換型、自由型に分けた。そして、承前型の文(いったん起こされた流れを受けつぐ姿勢を持つ文)の性質を表す主なものとして、接続詞や指示語などの「承前記号」、先行文中の語の反復や文の成分の省略などの「承前要素」を挙げ、特に承前記号の指示語については「文から文へ、意味の受け渡しをしていくのに最も重要な働きをする」(p122)としている。

ニュースをめぐる指示語の研究としては、金庭・川村(1999)が、文章構造の視点から論じている。ここでは、テレビニュースを量的に調べ、その構成をリード文と本文に分け、さらに本文をリード文で提示された主題と同時点か、それ以前・以降かという視点から、「背景」「詳細」「展望・付加」のブロックに分けた。そして、各ブロックで頻出する文頭・文末表現を調べ、例えば背景の文頭では「こ

の+名詞」や「これは」などが多く見られることを提示した。

石黒(2014)では、ニュースと新聞記事の指示語の使用を比較し、ニュースにコ系が多いことを明らかにし、ニュースが話し言葉性を帯びた「聞き言葉」とあると論じた。そして、話し言葉性が高い理由については、速報性を重視するニュースが「今」を伝える直示性を持つからだと指摘している。

本稿も、これらの談話構造や話し言葉性などの視点を踏まえて論じてゆく。

3. 調査

最近のNHKニュースと毎日新聞の記事を調査対象とした。各1000本余りを抽出し、ふさわしくないものを除いた上で、本文第1文冒頭(以下、「1冒」と本文第2文冒頭(以下、「2冒」)に使われる指示語を、コ系とソ系の別も含めて調べた²⁾。なお、本文第1文までしか存在しないニュース・記事もあり、本文第2文抽出時の母数はわずかに減る。

3.1 ニュースの抽出

NHKでは、完成した基本的なニュース原稿を「汎用原稿」と呼ぶ。一義的にはラジオ向けに書かれたもので、これをラジオ・テレビ・ネットニュースなど、媒体・番組ごとに改変して使う³⁾。本調査では、NHKのデータベース「NHKニュースアーカイブス」⁴⁾を利用し、2012年の「汎用原稿」5万2884本から毎月50本ごとに1本を選び、1062本を抽出した⁵⁾。ここから(ア)1文のみのもの(イ)2人の出演者が掛け合う形式のもの、を対象から外し、その結果992本となった。

次に、これをリード文と本文に分けた。先行研究から見て、ニュースのリード文には、以下の3つの特徴がある。

- ①当該ニュースの冒頭部にある
- ②当該ニュースの要旨を表す
- ③テレビではアナウンサーがスタジオで顔を出して読む⁶⁾

本稿ではテキストデータを使うため、①②を用いる。ニュース冒頭の1番目の文は①を満たすため、今回はすべてリード文とした。続く2番目の文は、通常は本文の冒頭文となるが、リード文の第2文(以下「第2リード文」)の可能性もあるため、本稿では本文を参照し、②を満たすかどうか、語句の繰り返しや意味から検討し、満たせば第2リード文とした⁷⁾(その場合、第3リード文の有無の可能性も同様の手順で確認した)。

3.2 新聞記事の抽出

毎日新聞の記事を収録した「CD—毎日新聞データ集 本社版」を使用した。2012年版には11万587本の記事があり、これらを毎月100本ごとに1本ずつ抽出し、合計1113本抽出した。ここから、以下のものを対象から外した。(ア)前文しかない記事(イ)冒頭に個人名が示された寄稿、著作権が外部にあるもの、声の欄の投稿(ウ)「社説」「余録」「人」欄などのコラム(エ)Q&A形式の記事(オ)発表文の要旨・骨子(カ)英語教育・童話などの欄(キ)試合結果や選挙結果など、句点のないもの(それに準じる「首相動向」「毎日新聞社からのお知らせ」)。その結果、593本となった。

次に、これらをリード文と本文に分けた。通常、新聞のリード文は記事の一段落

目だが、このデータにはタグが付いている。「前文」というタグの付いた文をリード文とし、それより後を本文とした⁸⁾。

3.3 ニュースと新聞のリード文の違い

こうした作業の結果、ニュースのリード文は第2リード文のあるニュースが112本(11.3%)、第3リード文までであるものが1本あり、リード文の平均の文の数は1.1文であった。一方、新聞記事のリード文は平均2.6文となった。さらに新聞はリード文の前に「見出し」が付く。両者のリード文は全く同じものとは言えないが、今回はそれらも踏まえた上で比較し、分析・考察を行いたい。

4. 調査結果の概要

まず、本調査の結果概要を表1に示す。ニュースに現れる指示語は、1冒で18.9%、2冒で32.7%に上ったのに対し、新聞記事ではそれぞれ、0.7%、3.9%にとどまった。なお、ニュースについては、1・2冒のいずれか(もしくは両方)にコ系ないソ系の指示語が使われたニュースの数は計436本に上り、全体(992本)の44.0%を占めた。

次に、調査結果を指示語別に整理し、

【表2 ニュースと新聞記事の1・2冒での指示語別の出現数と主な表現】

		ニュース				新聞記事			
		1冒		2冒		1冒		2冒	
コ系	この	132	この[実質的名詞]は(59)、この中(36)、このうち(20)	125	この中(35)、このうち(25)、このため(14)	2	このほか(1)、この日(1)	10	このため(4)、この日(2)
	これ	33	これは(29)	87	これについて(33)、これを受けて(20)、これは(13)、これに対して(8)	1	これまで(1)	1	これに対し(1)
	こう	1	こうした中(1)	22	こうした中(19)	0		1	こういう姿(1)
	ここ	1	ここにきて(1)	0		0		0	
ソ系	その	19	その上で(15)、その後(2)	48	その上で(32)、その結果(7)、その後(6)	0		6	その後(4)、その一方で(1)
	それ	1	それによりますと(1)	28	それによりますと(28)	0		3	それが、それ以降は、それから(各1)
	そこ	0		0		0		1	そこから(1)
	そんな	0		0		1		0	

【表1 ニュースと新聞記事の1・2冒での指示語出現状況】

	ニュース		新聞記事	
	1冒 n=992	2冒 n=948	1冒 n=593	2冒 n=558
コ系	167 (16.8%)	234 (24.7%)	3 (0.5%)	12 (2.2%)
ソ系	20 (2.0%)	76 (8.0%)	1 (0.2%)	10 (1.8%)
合計	187 (18.9%)	310 (32.7%)	4 (0.7%)	22 (3.9%)

主な表現を表2に示す。ニュースは、1冒は「この」「これ」「その」が多く、2冒も「この」が依然最多だが、1冒に比べ「これ」「こう」「その」「それ」の増加が目立った。新聞記事では、1・2冒を通していずれも出現数が10以下だった。

5. 調査結果の具体例

以下、ニュースの具体例を見てゆく。

5.1 1冒「この」

ニュースの1冒での「この」(132)(以下()内は出現数)の主な使われ方は、実質的な内容を伴う名詞が続く「この+[実質的名詞]+は」(59)と、形式名詞が続く「この中で」⁹⁾(36)、「このうち」(20)などである。

5.1.1 「この+[実質的名詞]+は」

「この+[実質的名詞]+は」の[実質的

名詞] 部分には、「事件」(9)、「調査」(7)、「問題」(5)、「イベント」「火事」「裁判」「事故」「催し」(各2)、などが来る。また、文末・文節末に「もので(す)」が来るものが、59例中38例あり、共起する傾向にある。以下、この事例をみる。

[1]【リード文】アメリカ南部・フロリダ州で、黒人の男子高校生が自警団の男に銃で撃たれて死亡した事件で、警察が男を逮捕しなかったことは「人種差別だ」として抗議する動きが全米各地に広がっていて、事件が起きた町では、これまでで最大規模の抗議デモが行われました。【本文】(第1文) この事件はことし2月下旬、17歳の黒人の高校生、トレイボン・マーティンさんが、自警団に所属する28歳の白人の男に路上で銃で撃たれて死亡したものです。(第2文)マーティンさんは、武器を所持していませんでしたが、警察は、州法で認められた正当防衛にあたるとして、男を逮捕しなかったことから、「人種差別だ」として抗議する声がインターネットなどを通じて全米に広がり、各地で抗議デモが行われています。(以下略・NHK)

1冒の「この事件」は、リード文の「アメリカ南部…死亡した事件」を指し、その事件の詳細(経緯や固有名など)を本文第1文で述べている。リード文で提示された出来事や問題を「この」で指して取り上げ、その成り立ちを説明する文が展開される。こうした「この」は、新聞では使われない傾向がある。[2]は、今回の調査データではないが、[1]と同時期のほぼ同内容を扱った新聞記事で、「事

件」には「この」が使用されていない。

[2]【見出し】米国：黒人少年射殺し放免「差別だ」逮捕求める抗議集会
【リード文】(第1文)米南部フロリダ州の路上で2月末、黒人少年(17)を射殺した自警団の男性(28)が「正当防衛」として逮捕されなかった事件があり、これに抗議する集会が24日、ワシントンやイリノイ州シカゴで開かれた。(第2文)(中略)【本文】(第1文)事件は2月26日、フロリダ州サンフォード郊外で、高校生のトレイボン・マーティンさんが帰宅途中、男性に胸を撃たれて死亡したもの。(以下略・毎日新聞)

5.1.2 「この中で」

[3]【リード文】国民の生活が第一の小沢代表は、記者会見で、来月の衆議院選挙に向けて、滋賀県の嘉田知事が新党の結成を検討していることに関連して、連携の呼びかけがあれば、政策などを協議した上で、具体的な連携のあり方を調整したいという考えを示しました。【本文】(第1文) この中で、小沢代表は、滋賀県の嘉田知事らとの連携について、「まだ嘉田知事から明確な発信もないし、新しい党ができたわけでもないの、コメントする段階ではない」と述べました。(第2文) その上で、小沢氏は、「嘉田知事が新しい党を作って、仮に、我々に連携の呼びかけがあれば、政策や主張を検討した上で、対応を決めていきたい」と述べ嘉田知事から連携の呼びかけがあれば、政策などを協議した上で、具体的な連携のあり方を調整したいという考えを示し

ました。(以下略・NHK)

1冒の「この中で」の「こ」は、リード文の「記者会見」を指す。リード文で提示した「状況」を改めて本文でも受けて、発言内容を伝えている。「この中で」の出現した36例中29例が国会議員や知事など要人の発言を伝えるニュースで、本文第1文の述部も、発言内容の後に「述べ(ました)」が来るものが多かった。

ここでの「この中で」は、第1文の途中までを聞いた時点では、リード文中の「記者会見」とも「考え」ともとれる。また、「この中で」を省いても意味は通じるだろう。「この中で」は、先行する文で提示された状況を大きく捉えて当該文に引き継ぎ、聞き手を誘導する定型化した表現と言えるだろう。

5.1.3 「このうち」

[4]【リード文】北海道のオホーツク海側などで断続的に雪が降っている影響で、北海道内のJRは、特急9本を含む89本の列車が運休になっています。【本文】(第1文)このうち、JR函館線は、きょう午前5時半ごろ、共和町内で、普通列車が線路に積もった雪のため、前に進めなくなりました。(第2文)列車には乗客6人が乗っていて、(以下略・NHK)

[4]の本文では、リード文で伝えられた全体状況の個別具体例や事態の内訳が示されている。「このうち」の「こ」の指示対象は、「『運休になっ』た』『89本の列車』か「北海道内のJR」か、やや漠然としているが、1冒でのこうした「このうち」の使用例は少なくない。リード文の状況を一挙に捉え、その個別具体例に誘

導する広義の接続表現(石黒ほか2009)として使われている可能性がある。

5.2 1冒「これ」

5.2.1 「これは」

1冒の「これ」(33)については、最も多かった「これは」(29)について述べる。

[5]【リード文】アメリカのIT企業、グーグルは、ハンドルやアクセルを操作しなくても目的地まで自動的に走る車のシステムを5年以内に実用化する計画を明らかにしました。【本文】(第1文)これは、グーグルが25日、カリフォルニア州と共同で開いたイベントで明らかにしたものです。(第2文)それによりまずと、このシステムは、レーザーを使って距離を測定する機器や衝突を防ぐセンサーを車に取り付け、グーグルが収集した膨大な地図データや車両の位置情報を解析することによって、ハンドルやアクセルを操作しなくても自動的に走行し、あらかじめ登録した目的地に到着できるものです。(以下略・NHK)

[5]の「これは」は、リード文の「ハンドルや…計画」を指し、本文第1文では発表者や発表日などが明示されている。述部は「明らかにしたものです」「発表したものです」などが多く、「これは」の出現した29例中21例で、文末・文節末に「もので(す)」が共起する。また、2冒では「それによりまずと」(11)が多く現れる。つまり1冒の「これは」は、リード文の出来事の成り立ちのうち、主にニュースの出どころである「情報源」に誘導する流れを作っており、本文第2文以降で、リード

文の主内容の詳細が伝えられる。一方、新聞記事では情報源は [6] のようにリード文中で示される例が多く、「これは」も使用されない傾向がある。

[6]【見出し】ビタミンE：取りすぎ注意 骨粗しょう症リスク高まるー慶大チーム

【リード文】(第1文) ビタミンEを取り過ぎると骨粗しょう症を起こす危険があることを、竹田秀・慶応大特任准教授の研究チームが突き止めた。(第2文) ビタミンEは、老化防止に有効とされる抗酸化作用があり、最も人気のあるサプリメント(栄養機能食品)の一つ。(第3文) 4月14日の米科学誌ネイチャー・コミュニケーションズ(電子版)に発表した。【本文】(第1文) 健康な骨は、骨を作る細胞と壊す細胞「破骨細胞」がバランス良く働いて維持される。(以下略・毎日新聞)

5.3 1冒「その」

1冒で「その上で」¹⁰⁾(15) が現れるものは、すべて人物の発言内容をリード文に続けて本文でも伝えるもので、多くは別のニュースの関連ニュースと見られる。15例中10例は本文が第1文のみで、リード文も要旨とは言えず、典型的なニュースの形ではないため、検討を省く。

5.4 2冒の指示語について

1冒に比べて2冒では、「この」の使用は横ばいであったのに対し、「これ」「こう」、ソ系の「その」「それ」が増える。

5.4.1 2冒「この」

2冒でも「この」(125) が最多だが、1冒

で「この+ [実質的名詞] +は」が多かったのに対し、2冒では「このうち」「このため」などの「この+ [形式名詞]」が増える(表3)。

【表3 ニュース1・2冒の「この+ [形式名詞]」の表現と出現数の比較】

	総数	「この」	この中で	このうち	このあと	このため	このほか	この結果	合計(%)
1冒	132	37	20	1	0	0	0	58(43.9)	
2冒	125	35	25	5	14	7	2	88(70.4)	

本文第1文の内容を状況として大ぐりに捉え、第2文でその内訳や、因果関係・時間経過で導かれた内容を示す表現である。[7]では、「このため」で、本文第1文と第2文の因果関係が示される。

[7]【リード文】首都直下地震に備え、JR東日本は、山手線や中央線などの線路の土台となる部分、いわゆる「盛土」などについて、この夏にも大規模な補強工事を始めることにしています。【本文】(第1文) JR東日本は、高架橋を対象に耐震化を進めてきましたが、東日本大震災では、線路の土台となる部分の「盛土」が崩れたり、線路沿いに建てられた電柱が傾いたりして復旧に時間がかかりました。(第2文) このため JR東日本は、首都直下地震を想定して、山手線や中央線など首都圏の各線を中心に、この夏にも、盛土や電柱などを対象にした大規模な補強工事を始めることにしています。(以下略・NHK)

5.4.2 2冒「これ」「こう」

2冒は、「これ」(87) は、「これについて」(33)、「これを受けて」(20)、「これは」(13)、「これに対し(て)」(8)が多く、「こ

う」(22)は大半が「こうした中」¹¹⁾(19)であった。2冒で増えた「これについて／を受けて／に対し」、「こうした中」は、第1文の提示内容を状況として捉えてニュースを展開させる定型化した表現で、広義の接続表現と言える。

[8]【リード文】東京証券取引所は、来年1月に予定している大阪証券取引所との経営統合に向けて大証を子会社化するために、あすからTOB＝株式の公開買い付けを始めると発表しました。【本文】(第1文)東京証券取引所と大阪証券取引所は、来年1月に経営統合することで合意していて、先週、公正取引委員会から経営統合の承認を得ました。(第2文) これを受けて、東証は大証を子会社化するため、あすから大証に対して、TOB＝株式の公開買い付けを始めると発表しました。(以下略・NHK)

5.4.3 2冒「その」「それ」

2冒でのソ系の使用(76)は、1冒から大幅に増える。「その」(48)は「その上で」(32)が多く、「それ」(28)はすべて「それによりますと」であった。1・2冒で指示語が連続で使われたものは(60)あるが、1冒でコ系が使われた場合、2冒の指示語は、(2冒全体ではコ系が多いにも関わらず)ソ系が多く、その組み合わせと数は、「コ系－コ系」(22)、「コ系－ソ系」(38)であった。「コ系－ソ系」で多いのは次の(a)(b)であった(〔6.考察〕で検討する)。(a)「(1冒)この中で…。(2冒)その上で…。」(19)・・・[3]参照
(b)「(1冒)これは…。(2冒)それによりますと…。」(11)・・・[5]参照

6. 考察

6.1 ニュースでの指示語の多用

放送メディアは送り手と受け手の間に常に同時性があり、とりわけニュースは、スタジオのアナウンサーが生放送で原稿を読む、「今」が強く演出された番組である。加えて、聞き手が聞き返すことができない一方性のメディアでもある。聞き手は、聞いている当該文が先行文とどのような関係にあるのか、さかのぼって確認できないため、文脈を見失うと元に戻るのが難しい。これが、文の冒頭から先行文とのつながりが明示的であれば、聞き手は心的負担の少ないまま、ニュースを理解してゆける。指示語は、音声メディアで聞き手の文脈を維持するために、文の冒頭で多用されていると考えられる。

一方、新聞記事はリード文を構成する文の数がニュースに比べて多く、1冒指示語でリード文の内容を指すことが難しい可能性がある。試みに、新聞記事のリード文の第2文冒頭を調べると、確かにコ系が9例見つかる(ただし、うち2例は先行文を指さない「これまで(に)」である)。しかし、この結果と比較しても、ニュースには指示語使用が多いと言える。

ニュースでコ系がソ系に比べて多いことについては、石黒(2014)が、ニュースではコ系がソ系の倍以上出現することを指摘し、その特徴について(「これに対し」「これを受け」などについて)「先行文脈そのものというより、先行文脈に示された状況を受けて後続文脈を展開するようなニュアンスがある」(p124)などと述べた上で、「今という時間を軸にした直示性に話し言葉らしさが現れている」

(p133) としている。ニュースの本文冒頭に限って指示語を調べた本稿ではコ系の多さがさらに際立つが、これも先行文脈を状況として捉えた表現が多用されているからだと思えることができよう。

加えて、話し言葉性を高める要素の一つにテレビの映像もあると言えるだろう。テレビニュースでは本文が読まれる際、映像はスタジオからVTRに切り替わるが、このとき1冒の指示語が指し示すリード文内の指示対象は、映像にも映っている可能性が多分にある。表4は最近のニュースの一例で、VTRが記者団への説明の様子を映し出したところで、1冒に「この中で」が使われている。眼前に映し出されたものに対しては、コ系のほうが映像との親和性が高いと言えよう¹²⁾。

【表4 テレビニュースでの本文1冒「この中で」使用例 (2017年8月7日23:15 NHK総合『ニュースチェック11』)】

	映像	ニュースのナレーション
リード文	スタジオ: アナウンサー	河野外務大臣は今夜、訪問先のフィリピンで、記者団に対し昨夜、北朝鮮のリ・ヨンホ外相と短時間ことは交わし、日朝ビョンヤン宣言に基づいて拉致核ミサイル問題の、包括的な解決を求めたことを明らかにしました。
本文	VTR: 河野外相の記者団への説明の様子～北朝鮮リ・ヨンホ外相	この中で河野外務大臣は、ASEAN、東南アジア諸国連合の一連の会議に出席した外相が参加して昨夜開かれた夕食会に先立ち、北朝鮮のリ・ヨンホ外相と、短時間立ち話をしたことを明らかにしました。(以下略)

6.2 1冒のコ系と2冒のコ系

1冒のコ系を整理すると、「この+ [実質的名詞]+は」¹³⁾や「これは」は、主に、リード文で提示された出来事や問題に注目してこれをコ系で指示し、その成り立ちを説明することから本文の流れを作るものと言える。特に「これは」の場合、情報源に関する内容が示されることが多い。そして、本文第2文以降で、リード文

の主内容の詳細が伝えられる。一方、「この中で」は、先行するリード文で提示された内容を状況として捉えている。この状況を当該文に引き継ぐ役割を担った表現と言える。

2冒のコ系は、「この+ [形式名詞]」、「これについて/を受けて/に対し」、「こうした中」などが多いが、これも先行する本文第1文を状況として捉えていることがわかる。形式名詞が続くことからとも言えるが、実際のニュースでも[8]のように本文第1文で状況が述べられている。本文第1文で表された状況をコ系で受け、その状況を起点として、続く第2文で、リード文で示されたニュースの主内容が改めて示されるという流れを作っている。ここからは、多くのニュースは(突然引き起こされるというよりも)、一定の現実の状況を踏まえて生まれている、あるいは書かれているということが言えるだろう。また、その状況を直示的なコ系で指しているのは、ニュースが「論理に基づく結びつきというより、事実に基づく結びつき」(石黒2014 p125)を表しているからだと言えよう。2冒コ系表現の多くが時間経過や事態推移を許容する表現となっているのもこうした理由によると考えられる。

6.3 2冒のソ系(「コ系-ソ系」)

ソ系は2冒で数を増やし、[5.4.3]で触れたように、1・2冒で指示語が連続で使われた場合は「コ系-ソ系」(38)が多い。これは、(a)の2冒「その上で」が、そもそもコ系の「この上で」をとりにくい表現であることが要因の一つであろう。加えて、コ系の連続使用で指示対象が引き継がれるのを避ける理由もあると考えられる。

[5.4.3] (b)「これは…。それによりますと…。」の文例として[5]を見ると、2冒の「それによりますと」の「それ」は、先行文の「ゲートルが…明らかにしたもの」という、情報源を表す部分を指すが、これを「これ」に変えると、1冒と2冒で同じ「これ」が繰り返されるため、1冒の「これ」の指示するリード文内の「ハンドルや…計画」を2冒の「これ」が再び指示して聞こえる可能性が出てくる。このため、2冒で本文第1文内を指示するときは、1冒と同じ指示語になるのを避けていることが考えられる(なお、1・2冒とも「これ」が使われたものは本調査では1例もなかった)。

(a) (b) の本文の展開をリード文との関係で見ると、ここでも本文第2文で、リード文で示されたニュースの主要内容が改めて示されることが多い。まず(a)は、要人の発言を伝えるニュースが19例中18例と多く、文例[3]のように本文1・2文とも同一の人物の発言が「」で伝えられる。ここで、リード文で伝えられた主要内容が再度始まる場所を見ると、第1文から始まるものが5例なのに対し、第2文から始まるものが12例で、同一人物の発言が続く中でも2冒「その上で」で主要内容に導かれることが多い。

また(b)は、[5.2.1]や[6.2]でも触れたが、文例[5]のように、1冒「これは」が、リード文の出来事の情報源に関する内容への流れを作り、リード文の主要内容の詳細は本文第2文以降で伝えられることが多い。実際、(b)は11例すべてにおいて本文第1文で情報源に関する内容が伝えられるが、うち9例は第2文でリード文の主要内容が再び伝えられる。

ただし、(b)2冒「それによりますと」は、

他とは異なる点が見られる。ニュースの「それによりますと」でソ系が使われることについては、石黒(2014)が、間接経験領域(田窪・金水1996)を参考に、「伝聞として伝えるとき」(p129)に用いられるのではないかと述べている。これを踏まえれば、2冒の「それによりますと」は、先行文脈の本文第1文を状況として捉えて第2文で引き継ぐ姿勢ではなく、情報源として捉え、続く文を伝聞情報として展開する姿勢を示していると言える。実際に[5]では、リード文と似た内容が展開される本文第2文の文末は、伝聞情報であることに対応して、リード文の文末「明らかにしました。」とは異なり、「(それによりますと、このシステムは)…ものです。」というように変化している(他の文例[1][3][7][8]では、リード文と本文第2文文末にこのような大きな変化は見られない)。2冒にソ系を含む(b)はニュースに多く登場するが、他とは異なる特異な展開を見せるものと言える。

本文第1文を情報源として捉えた「2冒でのソ系の選択」は、2冒に現れる「この(その)結果」(9)という表現の中にも見られた。この表現の使用は「この結果」(2)、「その結果」(7)とソ系が多いが、「その結果」の場合はみな、本文第1文で(調査や捜査などの)情報源が示されていた。一方、2冒が「この結果」の場合は、本文第1文ですでにリード文で示された内容が始まり、そこに情報源は示されていない。

ニュースにコ系が多いことは、先行文脈を状況として捉えて展開するものが多いことを伺わせるが、「それによりますと」などのソ系の使用は、先行文脈を状況としてではなく、情報源として捉え、

続いて展開する内容（それはニュースの主内容である）が伝聞情報であることを示す表現と言えるだろう。この情報源に関する内容は、新聞記事では[6]のようにリード文の最後（ここでは第3文）に示される。それがニュースではなぜ本文第1文で示されるのかはここでは論じられないが、ニュースが持つ特徴の一つとして、ソ系の使用とともに今後検討する必要があるだろう。

7.おわりに

本稿では、ニュースと新聞記事とを比較した上で、ニュースの本文第1・2文冒頭に指示語が多いこと、そしてニュースのリード文からどのようなつながりで本文が展開してゆくのか、その特徴の一端を明らかにした。ただし、指示語以外にも、接続詞や語の反復・省略など、文と文のつながりを表す記号や要素は存在する。今後はこうした点からもニュースの特徴を明らかにする必要があると考える。

注

- 1) リード文の説明は多々あるが、新聞記事では、「長い記事」に付く「要約」（小宮2011）、放送ニュースでは、「以下で扱うニュース内容を端的に言い表したもの」（星野2011）などとされる。リード文は、当該ニュースの要約、結論、骨子などを表すと考えられるが、本稿ではまとめて「要旨」と呼ぶことにする。
- 2) ア系は文脈外指示と考えて対象としなかったが、そもそも現れなかった。
- 3) ラジオでは汎用原稿をほぼそのまま使う（ニュース時間内に収める編集作業はある）。テレビでは汎用原稿を改変する

が、その程度は番組ごとに異なり、正午ニュースなどは改変が小さく、ニュースウォッチ9など、キャスターが掛け合ったり映像を中心に伝えたりするものは大きい。ネットニュースは汎用原稿に近いことが多いが、「きょう」などの時間表現を「○日」のように日付に変える。

- 4) 全国放送された汎用原稿が主に登録された部内者向けデータベース。データはネット上のデータベースサービス（G-Search）で、有料で公開されている。
- 5) 検索機能に制限があり、月ごとに時系列順に抽出した。新聞も同様にした。
- 6) 改変の少ないニュースの場合に限る。金庭・川村（1999）で使用。
- 7) ただし次のものは、本文で繰り返されず要旨にみえないが、テレビではスタジオのアナウンサーの映像で伝えられるため、例外的に第2リード文とした。
①著名人死亡のニュースでの年齢伝達文（「○歳でした。」）、②地震のニュースでの津波の有無伝達文（「この地震による津波の心配はありません。」）。
- 8) ただし前文に中見出しのような句点のないものが来る場合は、次の本文の段落を前文とし、その次からを本文とした。
- 9) 「中」は、かな表記も含む。
- 10) 「上」は、かな表記も含む。
- 11) 「中」は、かな表記も含む。
- 12) 汎用原稿は、閉文脈であるラジオ放送を前提に書かれるが、放送の主役がラジオからテレビに移る中で、テレビを意識したニュースが書かれるようになる。つまり、「ラジオ向け」から「テレビでも使用可能なラジオ向け」、そして「ラジオでも使用可能なテレビ向け」ニュースへと姿を変えている可能性がある。

13) 庵(2007)でこの用法は「先行する発話や文連続を指示しそれらに名付けをする」「ラベル貼り」(p92)であり、コ系しか使われないと説明されている。

参考文献

- 庵功雄(2007)「指示表現の記述(1)」,「語彙的結束性の記述(2)」『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版
- 石黒圭(2014)「指示語にみるニュースの話し言葉性」『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房
- 石黒圭・阿保きみ枝・佐川祥予・中村紗弥子・劉洋(2009)「接続表現のジャンル別出現頻度について」『一橋大学留学生センター紀要』12: pp73-85. 一橋大学留学生センター
- 井上鎮雄(1988)「ニュースの文体」『日本語百科大事典』大修館書店
- 金庭久美子・川村よし子(1999)「TVニュース構成の特徴分析とそれを支える表現」『日本語教育』101 pp1-10. 日本語教育学会
- 小宮千鶴子(2011)「新聞の文体」『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店
- 田窪行則・金水敏(1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3. pp59-74. 日本認知科学会
- 林四郎(1973)『文の姿勢の研究』(ひつじ書房2013)明治図書
- 林四郎(1983)「代名詞が指すもの、その指し方」『朝倉日本語講座五 運用 I』pp1-45. 朝倉書店
- 星野祐子(2011)「ラジオ・テレビのニュースの文体」『日本語文章・文体・表現事典』朝倉書店

付記

本稿は、2017年6月4日表現学会全国大会での研究発表「指示語の使用に見る放送ニュース原稿と新聞記事との比較—リード文(前文)と本文の関連に着目して—」をもとにしたものです。当日適切なご指導をくださった皆様に深く感謝申し上げます。

(一橋大学大学院生)